

大島正満

我等の夏目先生

我等の夏目先生

文豪漱石としてその名天下に著聞するに至った猫の主人も、我等が一高で初めて御目にかかった頃は、単なる英語の先生夏目金之助教授であつた。揚げ足を取つたり取られたり、兎とに角かく白線帽の三年間ロンドン仕込みの英語できたえられたのであるから我等に取ってはどこまでも恩師夏目先生である。ホトトギスにロンドン塔が現われ、猫が漸ようやく世に姿を見せた頃、云いかえれば明治卅五、六年頃の先生は、羽化して漱石となるべく、自らつ

むいだ美わしい繭の中に閑居していたのである。云わばさなまき蛹であつた時代の夏目先生に親しく英語を習つた教え子の一人として、今茲ここに漱石ならぬ夏目金之助教授の風貌を描いて見る。

博士の辞書

明治卅五〔三十六〕年の九月、天下の秀才の一人となつた筆者は、初めて一高の教室に踏み込んで所定の机に腰を下ろしたが、所謂いわゆる分館と号した平べつたい建物の教室が、中学のそれに比して如何に汚なかつたことよ。三

年生になるまで時計台のある赤煉瓦の本館に席を占める資格がないとのことで、幾多の博士の卵が座ったらしい傷だらけの座席に落ちつかねばならぬこととなったが、カンカンカンと鳴り響く鐘の音と共に、教室のドアをあけて無雑作に教壇に立ち上った英語の先生の姿が、中学校の誰氏彼氏に引き較べて、如何いかに垢抜けがしていたことよ。

生粹きつすいのロンドン仕立てとでも云うのであるうか、鶯うすがかった鼠ねずの背広がピタツとその身についている。顔一面にあばたが散在してはいるが、髪をきれいに分けて、ア

イロンでもかける身だしなみがあるのか毛の先が心持ち捲き上っている、そして上着のポケットからまっ白いハンカチーフの三角のはしがチラツと顔を出しているその調子のよさ、教室の見苦しさに引き加えて、高等学校の先生は役者が一枚上だナと云う感が起ると共に、その威容に押されたのか、一同片唾かたずをのんで教壇を注視した。これが初めて我等と顔を見合わせた夏目先生である。ロンドンから帰ったばかりの夏目教授の姿である。

無造作に出席簿を読み上げて、扱さて先生が頁を開いたのは、特に理科の生徒のためにと撰えらばれたサイエンスリ

ーダーと云う本であつた。行儀よく並んだ生徒の顔を一わたり見廻わして、「火山の噴火」と云う章をいきなり読み初めたが、その発音の正確で垢抜けがしていること、声ばかりを聞いたら誰がこれを日本人と感づこう。いや味の無い典型的な英国紳士の口をついて出る申分の無いその英語、我等は夏目先生に威圧された態ていで最初の一時間を夢のように過してしまった。

スタートで気合負けがしては、生徒は徹頭徹尾敗戦の憂き目を見なければならぬ。時を重ねる毎に夏目先生の突撃は猛烈さを加えて来た。そして生徒の誤訳を耳にす

る毎に、

「オイオイ待った待った。そんな訳はどこで見つけて来た」ときまいったように追突する。

「辞書に書いてあります」と生徒が答えると

「博士の書いたちっぽけな英和辞書だろう、駄目駄目」とまっこうからこき下ろす。

その頃世に行われていたのは、文学博士何某博言学博士イーストレーキと云うような名を連ねた赤い表紙の小さな英和辞書であった。

これより他に頼みにするものの中なかった生徒どもは、

お面を取られたりお胴を打たれたり、日々散々に打ちのめされているうちに、めくる頁の数がドシドシと重なって来た。こんなに進められたら試験が思いやられると心配し出した生徒軍は、やたらに質問を発しては課業を進ませない手段を取り出したが、百戦練磨の夏目先生がどうしてその手に乗せられよう。快刀乱麻を断つが如く愚にもつかぬ質問を受け流してはドシドシ授業を進めてゆく、これではたまらぬと騒ぎ出した生徒が額を集めて対策を練った結果、適当なる選手を押し立てて、十分間でよいから先生の授業を止めて見せようと云う案を立て

た。

その役目を負わされた筆者は、とつおいつ思案投げ首の態であったが、つと名案を思い浮べて、その夜図書館へと駆け込んだ、そしてウェーブスターの大辞書を借り出して、懸命に訳読の予習に取りかかった。そのうちに sole（ソール）と云う字が出て来たが、その場合「足裏」と訳するのが適訳であった。然し「したびらめ」と云う魚名と考えて無理にこじつけると何とか文意がまとまらないこともない。これこれとひそかに快哉かいさいを叫んだ筆者は、早速その訳を書き取った。そしてその翌日胸に棘を蔵し

て夏目先生の時間を待った。策戦通り名ざされた生徒が「やって来ません」とお辞儀をした。次とお鉢を廻わされた生徒もお辞儀をした。

「それでは大島君！」

と筆者が名ざされた。どしどし訳をつけて愈々問題の場いよいよ処に来たので、わざと声を張り上げ「したびらめが……」とやり出したら、早速例の「待った待った」が先生の口をついて出た。

「大島君！　そんな馬鹿な訳がどこにある」
「辞書に書いてあります」

「また博士の小辞書だろう」

「いいえ先生、大きな辞書に書いてあります」

「何と云う辞書だネ」

「ウエーブスターの大辞書です」

「馬鹿を云っては困るよ、それなら君、一寸本館の教

ちよつと

官室へ行つて、僕の机の上にあるウエーブスターを持つて来給え。そして君が見たと云う頁を見せて貰おう」

分館の教室から本館の教官室までは相当の距離がある。往復に十分はかかると目算をたてた筆者は、赤い舌をペロリと出しそろりそろりと歩を運んで、大辞書をか

かえて来た。

「どれどこに君の云う訳がある、サアあけて見せた見せた」

「先生これです」

と昨夜図書館で見えて置いた個処を指して示した。

「何だと、ソールとは平目的一种だと。して見れば君の見つけた訳も満ざらうそではないが、よく眼をあけてその上にある訳を見た。足の裏とチャーンと書いてあるだろう、辞書を見て適訳が拾えないような男はさしずめ注意点だナ よしよし、もっと先を読んだ読んだ」

約束の十分はとうに過ぎ去った。級友は俳味を帯びた夏目先生の顔を見上げてドツと笑いこけた、さすがの先生もこの時ばかりは狐につままれたような顔をして教壇を去ったが、今初めてかかるわなにはまったと聞き知ったら、地下にいます漱石先生は何と申さるることであろう。

大根問答

今は立派な人物になっているSが訳読を命ぜられて先ずリーディングを初めたが、Pleasant (プレザント)と

云う字をプリザントと読み上げたら、教壇から「待った待った」と云う声がかかった。

「S君！　今のところをもう一度読んだ」

夏目先生の命に依じてSは又もやプリザントと読んだので口鬚をひねり上げていた先生は、

「S君！」

と呼びとめた。

「君！　それはダイコンをデーコンと読むが如し、さあ先を読んだ読んだ」

とすました顔をして先を急がせた、Sは何のことか先生

の言がわからなかつたと見えてキョトンとした顔で立往生をしていた。

Sは今日帝都の中央に巢を構えてのさばっている。然し今でも尚プリザントとデーコンとの関係を解し兼ねているらしい。

江戸の敵を長崎

夏目先生は「やって来ません」とお辞儀をしても決して怒らない良い先生であった。出席簿をつけてから、毎時間きまったように一番隅の座席の生徒を指す。

「やって来ません」

「次ぎ！」

「やって来ません」

「次ぎ！」

「やって来ません」

次ぎ次ぎ次ぎと全生徒が将棋倒しにお辞儀をする時間が五分はかかったろう。最後のお辞儀を見届けた夏目先生は、

「それでは僕がやるから聞いていたまえ」

と云って、あざやか鮮な発音で読み上げては訳をつける。夏目

先生の英語は下読みをしないでよいものと相場を踏んだ生徒一同は、一学期を通じてお辞儀を仕通したが、とうするうちに試験に直面した。問題はやさしかった、筆者の如きはたしか確に百点と云う自信を持って答案をしたた認めた。

次の学期の初めに閻魔帳を持って教壇に姿を現わした夏目先生が「これより注意点を読み上げる」と宣告して、あばたづらに微笑を浮かべながら負傷者の名を呼び出した。首席の男二番の男三番の男、驚いたではないか全級すべて落第点であった。

「さあ又初めるぞ！」

と先生は一言も生徒の不勉強に言及しないで本を取りあげたが、寝首をかかれた生徒は、猫の主人の辛辣さに避易した。そしてその後は「やって来ません」と云う声を全く封じ込めて懸命に努力した。

授業を休まない弁

学年の終り近くに教科書があらかた片づいたので、

「先生！もうよい加減に休んで下さい」と生徒側から申し出た。

五つ紋の黒羽織に袴と云う出でたちの先生は椅子に腰を下ろし、教卓に頬杖をついて生徒を見下ろし、

「僕も休みたいがネ……」

と俳味を帯びた口調で語り出した。

「休むからには足腰を延ばして朝湯にもはいりたいさ。

手拭を下げてただ家へ帰るのもつまらないから、その足ばいげつで梅月（その頃一高附近で菓子を喰わせた家）へ行くとしよう。お茶を入れてすきな栗まんをつまんでいるところへ、僕が出勤しなければ君達も休だから、誰かがそこへやって来るだろう。生徒とにらみ合って菓子を喰ったん

じやうまくないから、梅月も朝湯もまった学校を休むことも僕はやめる。

それに手拭を下げて落雲館中学のあたりを歩いていると、頤に鬚の生えている人（当時の一高校長狩野亨吉博士）に出くわすから、一日身をかがめていなければならぬからネー。僕は頤に鬚の生えている人はこわいよ、そして窮屈な思おもいをして家にかがんでいるのは嫌だ。だから休むのはいやだよ、さあT君今日のところを読んだ」。

夏目先生にかかつては如何な一高の健児も刃向うすべ

がない。何と云われても突込む余地が無かった。我等の夏目先生は、後年果して漱石と銘を打って広い世界に躍り出た。その作品を手にする毎に我等の眼には恩師夏目先生の姿が浮び出る。そしてウェーブスターをかつぎ出したその当時の光景が、走馬灯の如く廻り出る。

（『政界往来』昭和七年十二月）

日本文学電子図書館

我等の夏目先生

著 者：大島正満

制作者：宮澤一郎

底 本：「漱石追想」

岩波文庫、岩波書店

2016年3月25日 第1刷発行

日本文学電子図書館